

「無肥料・無農薬・冬季湛水・不耕起栽培」

むかしの田んぼ・カグヤ米





「生き物いっぱい耕さない田んぼ」 藤崎農場

藤崎農場は千葉県の香取市にあります。利根川が流れ、対岸は茨城県稲敷市、田んぼの一部は神崎町にまたがっています。

藤崎農場では、不耕起栽培」でお米を育てています。

「不耕起栽培」とは、日本不耕起栽培普及会の岩澤信夫氏が提唱した自然農法で、田んぼを耕さないから「不耕起栽培」と言います。

耕さない主な理由は、土の反転をしないことで、土中に酵素を送らず、雑草の発芽を抑えることです。また、田んぼに一年中水を張った「沼」状態にすることも、「不耕起栽培」の特徴です。

藤崎農場さんとの出会い

カグヤで「発酵」について深め、学び始めた2012年。千葉県神崎市で自然酒を作る寺田本家さんの酒蔵を尋ねました。その際に、寺田本家24代目当主、寺田優さんから「寺田本家のお酒は、藤崎さんのお米を使っているんですよ」とご紹介頂きました。

それから毎年、田植えや草刈り、稲刈りとお手伝いに行っていました。2018年からは、藤崎農場さんの田んぼの一部をお借りし、「むかしの田んぼ」と名付け、カグヤ米を藤崎農場さんのご協力の元、育てはじめました。



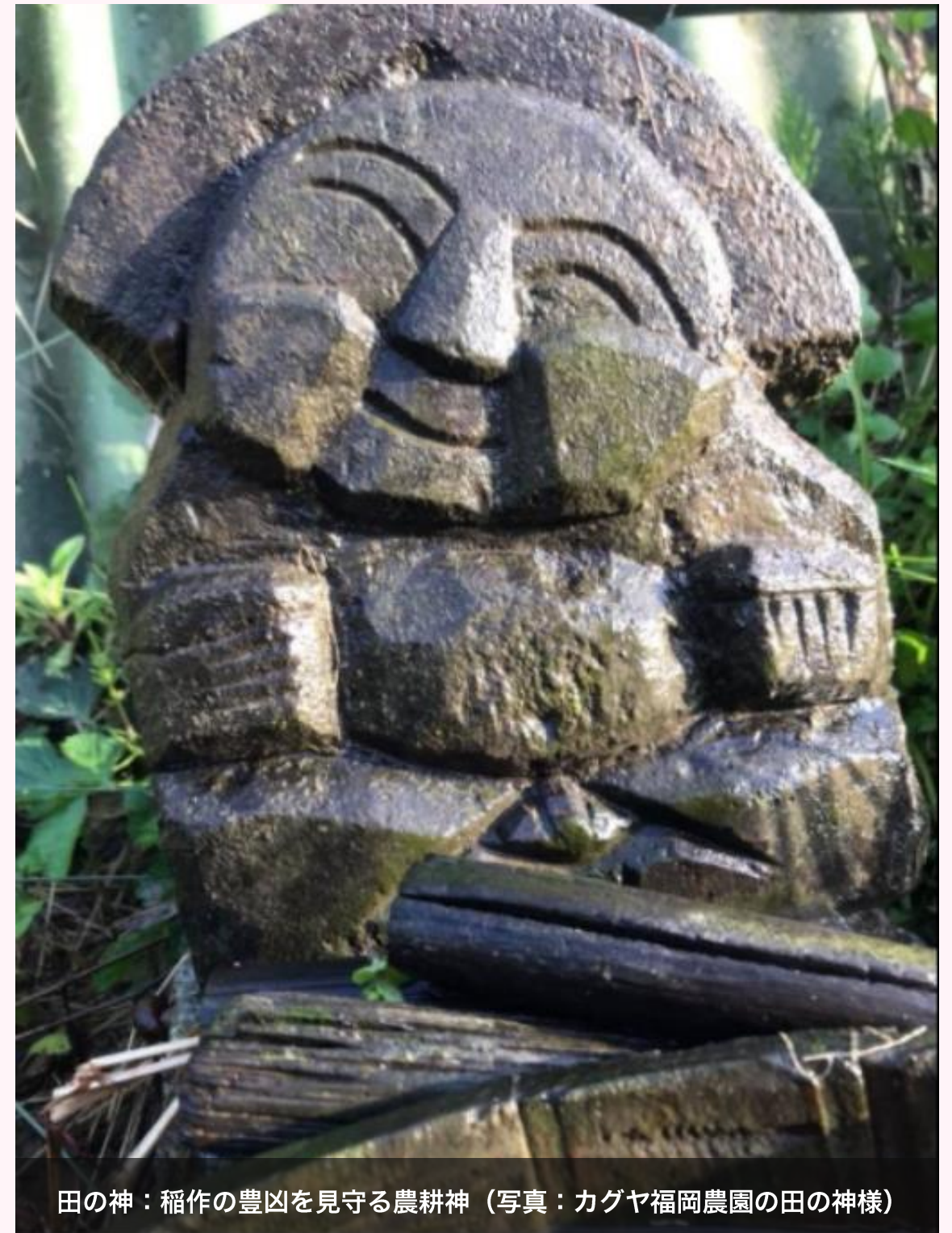
「むかしの田んぼ」とは



「むかしの田んぼ」は、古来から大切にしてきた日本人の精神を尊びお米づくりを行っています。それは八百万の神々にあるようにいのちを大切にするため、農薬は一切使わず、田んぼの生態系の働きを活かすようにしています。

冬の間は、水を張ることによって渡り鳥を中心とした冬鳥たちが飛来してきて、田んぼで冬を越していきます。その御蔭で雑草の種も攪拌（かくはん）され草取りの作業もあまり必要になりません。

大量の田螺（たにし）が毎年生まれては、お米を守り雑草たちの新芽を食べてくれます。まさに、自然の働きを上手に活かして自然の恩恵によって育てるお米。それを私たちは「むかしの田んぼ」と名付けた理由です。



田の神：稲作の豊凶を見守る農耕神（写真：カグヤ福岡農園の田の神様）

春の稲作開始時期になると家や里へ下って、田の神となり、秋には山へ帰る。田仕事に携わる農民の作業を見守る、田の神信仰は日本全国各地で伝承され、これを、田の神・山の神の「春秋去来」と言うそうです。

田の神像には地藏像、仏像、神像、農民型など様々あり、最も多いのは農民型の田の神像で、頭にわらの編み物を被り、右手にしゃもじを持って踊る姿の田の神様像だそうです。

「むかしの田んぼ」では、日本古来から
続いている伝統の年中行事を大切にしています。

●田の神祭り

祈年祭：五穀が無事に成熟を祈るお祭り

別名：春祭（としごいのまつり）：※とし=稲



御田植祭：農耕儀礼の最も重要な儀礼

早乙女：田植えの日に苗を植える女性のこと。ハシの役であり、神に奉仕する神役でもある。



新嘗祭：豊作を感謝するお祭り

地域によっては、新嘗祭までは新米を食べない地域も未だに存在しているそうです。



新嘗祭：田んぼの一角を刈り、かまどで炊いたご飯を味わいました。

通常の農家さんでは、子どもの苗（稚苗）を植えるそうですが、藤崎農場さんではそれよりも大きく育てた苗（成苗）を植えます。大人の苗になるまでにはあえて冬の厳しい気候のもとで育てることで、病気や自然災害に強くたくましい稲が育つのだそうです。そんな藤崎さんと郷さんの深い見守りによって育っているのは稲だけではなく、オタマジャクシやミミズ、タニシなどの生き物も共生しており、まさに「見守る田んぼ」です。

また。無農薬・無肥料で育てているため通常の稲よりも小ぶりですが、いのちの力はとても充実して、美味しいむかしの御米ができます。日本の農業は厳しい自然にあっても豊かなものであったはずです。それはかつての「日本の原風景」の中に遺っているように、みんなが笑い稲と一緒に育てていく中で豊かな時間を過ごしたから今日まで続いてきたのです。

農薬を一切使わず、タニシやカエル、ドジョウに水鳥、そんな生き物たちの力を借りつつ、稲自身の力で育った自然米。この一粒一粒が未来への懸け橋となることを信じています。

私たちが田んぼに携わるのは、お米を育てたいのではなく日本人の

生き方や智慧を子どもたちに伝承しようと取り組んでいるからです。

一般的なお米作りの流れ

藤崎農場でのお米作りの流れ

1月

●種籾の塩水選

2月下旬～3月

●種まき、苗づくり
次頁にインタビュー記事を掲載！

正月早々、種もみの塩水選を行い2月下旬には種まきです。
藤崎農場は1ヶ月も早く種を播きます。
田んぼにはオタマジャクシがいっぱい、田植えが始まります
(半不耕起では田植え前に田んぼの表面だけ軽にかき混ぜます)。

4月

●苗づくり

●種まきの後25日経ったら、育苗ハウスを全開し、
自然の状態で5.5葉の成苗(大人の苗)に育てます。

一般の農法では稚苗(2.5葉の子どもの苗)を使います。
育苗期間は慣行農法では25日前後のところ、
不耕起栽培では倍の約60日と長くなりますが、
丈夫な大人の苗を植える事により、
害虫や病気に強い稲になります。

苗の育つ環境が肝心！

5月

●田起こし

●田植え

6月

●田植え

●草取り・水の管理

稲はすくすく育ちます。雑草も頑張って伸びます。除草剤は使わないので、昔のように人力で除草します。
田んぼの中はカエル、メダカ、タニシ、ザリガニ、クモ、水生昆虫がいっぱいです。空にはトンボ、ツバメ、サギが飛んでいます。

7～8月

●草取り・水の管理

●草取り・水の管理

7月末から8月初めにかけて、一斉に穂を出し花が咲き受粉し、
登熟期に入ります。

9月～10月

●稲刈り、乾燥・脱穀、
籾摺り(もみすり)

●稲刈り、乾燥・脱穀、
籾摺り(もみすり)

稲刈り後

●代掻き

●冬季湛水(通年湛水)
田んぼに糠を撒いて水をはります。

刈り取りの終わった田んぼに米ぬかを撒き、水を張ります。
米ぬかは生きものの食べ物になります。田んぼは冬期湛水、
氷の張った水中にも生きものの活動がみられます。
冬の静かな田んぼは、鴨がよく遊びに来ます。時々白鳥も飛来
します。2月から3月にかけてニホンアカガエルが産卵のため、
水を求めて田んぼに集まります。

冬も生き物がいっぱい！



藤崎農場で働く郷さんに一般的な田んぼとの「種まき」の違いについてお話を伺いました。

郷…藤崎農場では、稚苗（ちびょう…こどもの苗）と成苗（せいびょう…大人の苗）で言うと、成苗を田んぼに植えています。一般的な農家さんは、稚苗を田んぼに植えて、薬や肥料をあげて大きく育てるんです。

眞田…稚苗成苗も見ただ目の大きさ、長さ的には同じなんですか？

郷…葉っぱの枚数が違います。稚苗は葉っぱの枚数が、2枚半くらい。成苗は、葉っぱが5枚位。まだ、この時期（3月上旬）は他の農家さんは種まきをしていないですが、藤崎農場は約1ヶ月半位、他の農家さんに比べると種まきが早いです。普通は、苗箱に、芝生みたいにびっしり生えています。でも、藤崎さんは、苗箱1枚に対して、70gくらいの粉（もみ）を撒いて

いて、普通の農家さんは、200g撒いているので、下の土が見えない位、びっしり撒いています。

そうすると、隣の苗を邪魔するから、稚苗じゃないと、そのまま成苗までは育たない。場所がないから、そうしないと効率が悪い。

眞田…密集させて作ったデメリットはありますか？

郷…病気に弱い、肥料もたくさん使う。太らせてしまう。動物で言えば、えさを食べなくても、あげるからそれなりに身が付く。無理に食べさせて、フォアグラを作る感じ。藤崎さんの考え方はそうではなく、自然のままにゆっくりと、苗も大人の苗になるまで、ゆっくり育て、本田に植えてからも、肥料もそんなにやらない。そうすると、

一生懸命自分で努力して、肥料を吸おうとする。

眞田…自分で吸おうとすると、調整する力が強くなるんですね。

郷…今の農業は過保護だから、化学肥料を多用する。基本的な作り方が違う。

藤崎さんの場合は、隣近所より収量が採れない。採らなくてもいいと考えていて、採ると美味しくないと考えている。自然に任せて、できればいい。

大河内…稚苗で植えるのは収量を上げるためですか？

郷…短い期間で育てるから手間がかからない。箱数と言つが、田植えするときに、

30枚くらい使う。普通の農家は10枚以下。ちょこちょこって、行ってみれば合理的。短くしてやれば、とれるよね。

何でもそうだけど、農業を工業化してしまつと、効率を考えるよね。そのために、肥料や農薬を使わないといけなくなっちゃう。藤崎さんの苗だと、大人の苗だから病気にもある程度強いし、虫に食われてもいい。ジャンボタニシは普通の農家は毛嫌いしている。稚苗だと柔らかいから食べられてしまう。藤崎さんの苗は、

ススキみたいだから硬くて、タニシが食べれない。だから雑草を食べてくれる。最初の考え方が違います。

田んぼにいる生き物たち



藤崎農場HPより引用

生き物いっぱいの田んぼ

—ビオトープとしての魅力

保育関係者も藤崎農場を見学！

東京都八王子市にせいがの森こども園さんでは、園にビオトープを作る際に藤崎農場さんを訪ね、田んぼの生態系を見学されたと言います。

藤崎農場の田んぼの特徴

慣行農法では冬場は田んぼの水をぬいています。藤崎農場田んぼでは、水をはる事により、いろいろな生き物がいっぱいになります。

殺虫剤を使わないこの田んぼは、稲にとって悪い虫もありますが、それを食べるクモも沢山います。耕さない田んぼは、生き物いっぱいの自然に近い環境です。自然と一緒に稲を育て、お米を作る、これが耕さない田んぼです。

春：少し早く種蒔きをして、寒さと時間をかけて強い苗を作ります。成苗（大人の苗）に近くなるまで育苗ハウスで育て、おたまじゃくしの泳ぐ田んぼに田植えをします。

夏：カエル、めだか、どじょう、タニシ、ザリガニなどいっぱいです。稲はすくすく育ち、花が咲き、稲穂が風にそよぎます。雑草もたくさん出るので草取りが大変です。

秋：収穫の秋。田んぼの水を抜き、コンバインで稲刈りです。稲刈りをしていると、ツバメが空を舞い、虫を捕らえ、鷺がカエルやイナゴを食べています。

冬：田んぼに水があるので鴨や白鳥が飛んで来ます。水の中は小さな生き物がいます。春近くなるとアカガエルが産卵し、おたまじゃくしも泳ぎ出します。

自然農から学ぶ

(2019年3月18日 カグヤグループログ「自然農から学ぶ」 眞田海さんより引用)

今日は藤崎農場さんへお邪魔し、苗づくりのための「種まき」の一部を見せて頂きました。

種を蒔いてからは田植えまでは一日も目が離せないと藤崎さんはおっしゃいます。それは、種を取り巻く環境が一日の中でも刻一刻と変わり続けるからだそうです。暖かい気温の中で放置すれば、伸びすぎてしまい、軟弱なひよろひよろとした苗が出来、田植えをしたときに病気になりやすいそうです。

また、温度が高くなりすぎれば、死んでしまうこともあるそうです。寒い気温の中で放置すれば、育ちません。その時々気温を見ては、ハウスを開けたり閉めたりと、稲の心地よい温度になるように寄り添うそうです。

なんだか、乳児の頃の子もとの寄り添いにとっても似ているように感じます。手間がかからない時期になるまでは、とことん手間がかかる時期がある。しかし、だからと言って「やってあげすぎ」にならないように、必要な時には厳しく、必要な時に優しく寄り添うそうです。

そんな寄り添いの連続の日々があるからこそ、田植え以降には、しっかりとした強い稲へと育ち、見守る距離感を遠く保つことが出来たり、人間がかかわるだけでなく、土や虫、根粒菌などの助けを借りて、育っていけるようになるのだと学びました。

さて、この「必要な寄り添い」。稲の苗の場合は、苗を見て、天気を見て気温などで判断しますが、子どもの場合は、子どもを見て、何を見て判断するのでしょうか。

きっとそれが、「発達」であり「個性」であり、「興味関心」であるのかもしれません。さて、それでは今度は、自分自身には？！そう問いかけたとき、意外と自分自身のことが見えていないことや、見えていても、寄り添う気持ちが持てなかったり。寄り添おうと思っても、方法が見つからなかったり。そんなことが多々あります。

自分では分からないことは、人に聴いたり、見てもらったり、教えてもらって自分を理解し、挑戦していく。そんな姿は子どもたちから学ぶ必要があるものであり、そして、大人として残していきたい姿でもあるかもしれません。

人に頼れる強さ。人に感謝して生きる強さ。人の言葉を素直に聴ける強さ。人を信じ、愛せる強さ。人類が社会を形成してきたのは、人類の「強み」を活かしその智慧を伝承していく為なのかもしれません。

中国の古典「孟子」―助長の話



●「助長」の書き下し文

宋人に其の苗の長ぜ^ふ不^るを^う閔^えて之^をを^ぬ攣^く者有り。

ぼうぼうぜん^{ぼうぼうぜん}芒^{ぼうぼうぜん}芒^{ぼうぼうぜん}然^{ぼうぼうぜん}として^{ぼうぼうぜん}帰り、其の人に謂いて曰く、^{こん}今日^{にちつ}病^るる。

^{われ}予^{われ}苗^{われ}を^{われ}助^{われ}け^{われ}長^{われ}ぜ^{われ}し^{われ}む。

其の子^{はし}趨^ゆり^{はし}往^ゆきて^{はし}之^{はし}を^{はし}視^ゆれば、苗^{はし}則^ゆち^{はし}槁^かれたり。

天下の苗を助けて長ぜ不らしむ者^{すくな}寡^{すくな}し。

●「助長」の現代語訳

宋の国に畑の苗が伸びないのを心配して、手で引っばって伸ばした男がいた。ぐったり疲れ果てて家に帰り、「今日は、疲れた。自分は、苗を助けようと思って早く伸びるように一本一本引っばってやった」と話した。驚いた息子が走って行って見てみると、苗はすでにみな枯れてしおれていた。」

「不必要な力添えをして、かえって害すること」という意味で「助長」は遣われ、苗を無理に引っ張り、育てようとすると枯れてしまうようです。苗が自ら成長する環境を用意していくことが必要なのだと感じます。

【藤崎農園を通して思うこと】

これまでも何度かこのメールマガジンで藤崎農場さんのことを取りあげてきました。

田植えや草刈り、秋の収穫などその時々学びがあり報告してきましたが、ここで改めてお米作りに携わる意味を改めて振り返ってみました。

藤崎農場さんとの出会い早 7 年が経ちます。毎回、お米作りのお話を藤崎さん、郷さんから伺ってきました。

藤崎さんは「種まきが始めると、今年も始まったと感ずます。田植えまでは休みなしです」と仰っていました。そのイキイキと嬉しそうな表情を見て、楽しくお米に関わっているから、藤崎さんのお米は美味しいのだということを改めて感ずしました。

特に、お二方が「苗」と話されるところを「子ども」と置き換えて考えると、子どもたちに、どういった環境が重要なのかということを考えさせられます。

そして、田んぼへ行って嬉しいのが、毎回藤崎ご夫妻がお菓子やジュース、時にはアイスなども用意してくれて、一緒にご飯を食べながら談笑するひとは、何よりも得難いものです。

まるで田舎のおじいちゃん、おばあちゃん家に行った時のように迎え入れてくれ、かまどで炊いた炊き立てのご飯を田んぼで食べるのは格別の美味しさです。

故事に「桃李もの言わざれども下自ら蹊を成す」があります。藤崎さんの田んぼには、生き物たちがいっぱい集まってきましたが、同じように私もこの田んぼに集まった一員なのだと感ずます。

子どもたちにとって大切な環境とは何なのか、今後もお米作りを通して学んでいきたいと思ひます。

2019 年 4 月 8 日 株式会社カグヤ 奥山卓矢



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2 号館 10 階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。



昔ながらの天日干し

稲架掛け（はざかけ）：束ねた稲を稲架（はざ）に掛けて、天日と風によって乾燥させます。